

総合演劇雑誌

テアトロ

2
2020

◎総括座談会◎ [2019年の日本演劇界]

演劇黎明期へ

高橋宏幸／渡辺 保／江原吉博／林あまり／杉山 弘
(司会／本誌・安井武彦)

2019年のクロニクル

横溝幸子(ミュージカル)／犬丸 治(歌舞伎)／九鬼葉子(関西演劇界)

エッセイ 川口啓史／渡辺 淳

リポート ロンドン／みなもとごろう レバノン／江原早哉香

●連載 共創する空間へ③② 西堂行人／旅する演出家①⑦ 流山児 祥

今月選んだベストスリー ③07 林 あまり

第32回テアトロ新人戯曲賞
一次通過作品発表!

◇ 戯曲 ◇

京河原町四条
上ル近江屋二階

福田善之



No. 970

しいが、地面がでこぼこの歪な空間造形の下での家庭劇。見て見ぬふりをし、てさりげなく生活する現代人をリアルに照射した、普遍的な舞台。



12月の 関西

多様な象徴性から浮上するリアリティ

清流劇場「野がも」

空の驛舎「ステインドグラス」

遊劇体「空のトリカゴ」

極東退屈道場「ジャンクシヨン」

劇団いちびり一家十南河内万歳一座☆オールスターズ「デタラメカニズム」

九鬼葉子

清流劇場が、イプセンの『野がも』

を上演（11月16日、大阪市の一心寺シアター倶楽で所見、田中孝弥構成・演出）。

豪商ヴェルレ（倉増哲州）の息子・

グレーゲルス（高口真吾）が久しぶりに帰郷。旧友のヤルマール（孫高宏）

と再会する。ヤルマールの父（藤本栄治）は、ヴェルレの山林事業の共同経営者だったが、国有林伐採の不正により逮捕され、氣力を失い、ヴェルレから援助を受けていた。グレーゲルスは、

不正に父が関与していたと疑う。さらにヤルマールの妻が、父の元愛人・

ギーナ（日永貴子）と知り、彼の娘・

ヘドヴィク（服部桃子）が、実は父の子であると確信。理想主義者の彼はヤルマールに、真実を知った上で家族関係を再構築するよう、諭そうとする。

舞台はヤルマール家の団欒の部屋。前には無数の木片。頭上には青いネットがかかり、息苦しい世界。海底（うなぞこ）を象徴、また家庭が隠し事で覆われていることを想起させる。木片は、歩きにくそうに進む俳優の姿から、

「現実」を暗示するように見える。屋根裏では野がもが飼われている。野生でありながら飼いならされた野がもは、

多彩な象徴性を帯びる。

真実を追求した結果、ヘドヴィクの自殺という悲劇を迎える。自分は正しいことをしたと主張するグレーゲルスを、高口真吾は滑稽に造形。一方、過去の過ちを忘れ、物事を深く考えず日々の暮らしを懸命に生きるギーナを、

日永貴子はしなやかに描写。愚かともいえるが、この生き方も否定できないと思える説得力のある演技。

正義・真実の追求か、虚偽に目を瞑り、平穏に生きるのか。広く社会で直面する難題。答えは観客に委ねられた。

真実と幸福が両立できない世の中であること自体が歪んでいる。色合いは美

ヘドヴィク（服部桃子）が、実は父の子であると確信。理想主義者の彼はヤルマールに、真実を知った上で家族関係を再構築するよう、諭そうとする。

真実を追求した結果、ヘドヴィクの自殺という悲劇を迎える。自分は正しいことをしたと主張するグレーゲルスを、高口真吾は滑稽に造形。一方、過去の過ちを忘れ、物事を深く考えず日々の暮らしを懸命に生きるギーナを、日永貴子はしなやかに描写。愚かともいえるが、この生き方も否定できないと思える説得力のある演技。

多彩な象徴性を帯びる。



2019年の関西演劇界

—新劇場開館で弾み。表現も多彩に—

九鬼葉子

2019年の朗報は、京都の新劇場・THEATRE E9 KYOTOの開館だ。アーティスト達の熱意で誕生した新拠点。オープニングプログラムは完売が続き、活気づく。

関西の劇団の動きでは若手が台頭、ベテラン劇団とともに層が厚くなっている。ベテランでは、田中孝弥率いる清流劇場が尼崎市民芸術賞（田中孝弥）と、兵庫県芸術奨励賞（清流劇場）をW受賞、評価が高まる。「壁の向こうのダントン」（ビューヒナー原作）、イブセン初挑戦となる『野がも』など、名作を現代に通じる普遍的な舞台に仕上げた。

南河内万歳一座が、1984年初演の代表作『唇に聴いてみる』（内藤裕敬作・演出）を再演、初演以上に都市の孤独を際立たせた。劇団太陽族は新作『辻の詩、風を待つ』（岩崎正裕作・演出）で、社会構造の矛盾と反戦を訴えかけ、桃園会は新作『わたしは家族』（橋本健司作・演出）で、アル

コール依存症の家族問題に切り込んだ。空の驛舎の新作『ステインドグラス』（中村ケンシ作・演出）は、教育現場の危機感を描いた力作。エイチエムピー・シアターカンパニーは、『女殺油地獄逢魔辻』『忠臣蔵・破 エートス／死』（笠井友仁演出）など古典を題材に、独特の身体感覚と空間造形で完成度の高い舞台を披露。空晴の新作『明日の遠まわり』（岡部尚子作・演出）は独自のスタイルを確立した代表作。東京と大阪を拠点に活動するB2Bの横山拓也は、新作『あつい胸さわぎ』で、母娘の微妙な関係と、二人にかかわる様々な人々の葛藤を、大阪弁で軽快に展開した。

大竹野正典の没後10年。改めて評価が高まる中、くじら企画が『海のホタル』を再演。ほかにオフィスコットーネのプロデュースで「山の声」が初演と同じキャストで再演されるなど、多くの団体が大竹野戯曲に挑み、熱演が続いた。

京都勢では、男優5人で活動してきたMONOが、結成30周年を機に、若手俳優4人を起用、新体制に。新作『はなから』（土田英生作・演出）では分断社会の構図を浮かび上がらせた。遊劇体の新作『空のトリカゴ』（キタモトマサヤ作・演出）は、架空の町・ツダを舞台にした連作第9弾。青年と、かつての学生運動家の伯父との出会い。社会に反抗する生き方をした者の末路は悲哀に満ちるが、次世代に希望を残した。ヨーロッパ企画は、『ギョエー！ 旧校舎の77不思議』（上田誠作・演出）で「オカルト青春コメディ」と銘打ち、ホラーに初挑戦。冒頭の新劇場誕生の立役者・あこうさとしは、『触覚の宮殿』を、音楽舞台劇として改訂再演。地点は『三人姉妹』（チェーホフ作、三浦基演出）を始め、卓越した身体性で精力的に活動を続けている。

兵庫県立ピッコロ劇団は、手塚治虫の自伝的3作品を原作とする『マンガの虫は空こえて』（島守辰明作）で岩崎正裕を演出に迎え、好評を博した。ほかに若手中心による『炎の人—ゴッホ小伝—』（三好十郎作、眞山直則演出）、『ブルーストッキングの女たち』（宮本研作、稲葉賀恵演出）など。劇団未来がダイアナ・ソンの『ストップ・キス』（しまよしみち演出）で、LGBTへの偏見に対し問題提起。劇団五期会の『さくらのその』（チェーホフ原作、森脇京子脚色、井之上淳演出）は、俳優の層の厚さを象徴する舞台。

躍進する若手劇団。神戸アートビレージセンターが「KAVC FLAG COMPANY」と題し、7劇団を招聘。匿名劇壇

の新作『大暴力』（福谷圭祐作・演出）、コトリ会議の新作『セミの空の空』（山本正典作・演出）など、空間を自在に使い、実験性の高い舞台が続いた。

ほかに、実在の事件をモチーフに、若いエナジー溢れる舞台を展開する遊劇舞台二月病は、新作『shadow』（中川真一作・演出）を披露。ももちの世界のピンク地底人3号の新作『カンザキ』は、現代社会の諸問題を、小さな共同体に集約させた、圧巻の筆力。京都の夕暮れ杜弱男ユニットの『サンクコストは墓場に立つ』（村上慎太郎作・演出）も出色。劇場企画では、伊丹市立のアイホールによる若手支援の

「次世代応援企画break a leg」に成果。第24回OMS戯曲賞佳作受賞作家・植松厚太郎の新作『夕方方暮れる』を立ツ鳥会議が上演。残酷な現状を鋭く捉えつつ、乾いたユーモアを湛えた舞台。吹田市立のメイシアターも、『少年王國記』（笠井友仁作・演出）や『サイカイッ』（岡部尚子作・演出）など、意欲的な自主企画。兵庫県立芸術文化センターは、東京芸術劇場との共同製作で『Le Page 父』（ゼレール作、シヨラー演出）を上演するなど、質の高い事業を続ける。

大阪ガス株式会社主催「イストワールhistoire」は、関西に実在した人物や事件を題材にしたシリーズ。第10回は、PM／飛ぶ教室の蟬螂襲作・演出『港でカモメがやすんでる日はね、千帆ちゃん』。神戸港内をクルージングしながらの観劇体験。阪神・淡路大震災から見事に復興した港を眺めながら、被災者に改めて思いを馳せる貴重な時間となった。